

国語 5年A組	ようこそ杉みき子ワールドへ －10初読・1熟読・1再読による再発見－	須佐 宏
--------------------------	---	-------------

1. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

① 10初読・1熟読・1再読による再発見

本単元においては、子どもたちの実態を考慮し、単元の導入にあたって、作者杉みき子さん、そして、杉さんの描く物語の世界への興味づけとして、「杉さんクイズ 10」を用意すると共に、『わらぐつの中の神様』を含む杉さんの代表作10編が収められている文庫本『かくまきの歌』を1人1冊ずつ持たせ、それを読むことでクイズの答えを類推させることにした。さらに、子どもたちには、それらのうち『わらぐつの中の神様』を除く9作品について、「初読の一言感想」を書かせることにした。9つの作品を学級のみんが一緒に読み進めていくことにより、杉作品に共通して流れる家族愛や、思いやり、成長、時代背景や雪国という場面設定、などに触れながら、『わらぐつの中の神様』を熟読していく。そして、「読み取ったことを互いに伝え合う学習」を通して、次への「初読力」(※詳細は、国語科教科提案参照)を培い、培った力を活かして9作品を振り返らせたいと考えた。単元の終わりには、特に気に入った1作品について再読し、初読では気づけなかったが、再読で気づいたことを交流し、学級全体で杉さんの描く物語を堪能できるような学習を計画した。

② 子どもたちと熟読教材『わらぐつの中の神様』

本学級の子どもたちは、とても素直な子どもたちであるが、自分で考えて判断し、行動したり、アイデアを働かせるという点においては弱い面がある。また、困難に出くわすとすぐにあきらめてしまう傾向もあり、「すぐにあきらめない!」「アイデアを働かそう!」「自分で考えて動こう!」という話を繰り返ししてきた。本単元で熟読教材とした『わらぐつの中の神様』の読み深めでは、主題にせまる部分だけでなく、主人公の言動から自分たちの生活にも目を向けながら読み進められるようにしたいと考えていた。

③ 学習課題に必然性を持たせる

授業の中での発言に目を向けると、男女合わせて約5～6名が常時発言をし、それに数名の男子が絡んで約10数名で授業を進めていることが多い。しかし、女子の中にも、指名されると声量は乏しいが、何度やり直しをさせられても根気よく意見を伝えようとする子がいる。発言することだけが授業への参加ではないと思うし、発言できにくい子には、友達の発言からよいと思う考えをもらって追記するように指導しているが、できることなら自分の考えを授業の流れの中で発言できるようにしていきたい。1学期に行った校内研究授業でも、そのように心がけて学習を展開した。実際の授業では、上記の常連組に混じって初めて自ら進んで発言をした子が多数いた。何がそうさせたのかを振り返ってみてわかったことは、前者の常連組の子どもたちは、課題がそれほどよいものでなくても、興味を持って学習に参加できる子どもたちであり、後者の子どもたちは、学習課題に子どもたちにとっての必然性があり、子どもたちの話し合いが高まっている時にのみ、自ら発言できているということである。よって、学習課題は、子どもたちにとって、必然性のあるものでなければならぬ。子どもたちと共にそんな学習課題を作っていくことを大切にしたいと考えていた。

④ 音読記録を効果的に取り入れた学習 ～ICレコーダーの活用～

私は、これまでも高学年における音読指導の必要性を述べてきた。それは、声に出して発言することを苦手とする子にも、声をしっかり出す機会を与えることになるということや朗読への高まりを意識させることで、より深い読みにつながることを期待できるということ、また、朗読することそのものを楽しむことが、国語の学習における楽しみになりうると考えるからである。子どもたちは、4月以降、朝の会や授業のちょっとした時間を使って詩の音読やテープレコーダーを活用した音読記録による読み深め、聞き手を意識した朗読などに挑戦してきた。本単元においては、さらに利便性を高めるためICレコーダーの導入を考えていた。授業における話し合いの場面で必要に応じて会話文の音読や場面音読を取り入れながら、聞き返し、表現と理解を融合させながら読み深めることが出来れば

と考えていた。

(2) 教科提案 (『関連して伝え合い、「初読力」を育む

～自己変革を確かめながら～』) とのかかわり

①ひとり読みの充実・・・伝え合いの授業においては、友達の発言したことに反応しながら聞き、友達の発言したことに関わって話したり、考えたりすることで互いの考えを深めていけるようにしたい。そのために、話し合いの前には、課題についてのひとり読みの時間を十分確保した。そうすることで、課題について自己の考え(読み)を確かに持って話し合いに参加することが可能となる。また、たとえ自分の考えを明記できなかったとしても、それについて熟考したことによって、友達のどの発言が自分に最も響いてくるのかを考えさせることで主体的に話し合いに参加できるようにした。

②みどりの充実と確かな支援によって響き合う学習へ・・・子どもたちが上記のひとり読みによってどんなことに気づいたのか、どんな考えを持ったのか、どんな読み方をしたのか、どんな疑問を持ったのか、どんなつまづきがあるのかを指導者がみとった上で授業に臨ませた。そうすることで、友達の発言に反応している子どもたちの内面を探り、授業の中で子どもたちの発言をどうつなぎ、どうつむぐかを考えながら学習を進めていく。自分の考えが出せないでいる子には、学習の流れに沿って、必要な場面で発言を促していくこともする。また、考えたけれど、自分の考えを明確に出来ないでいた子には、友達の発言を自分のところへ追記させることで共感できるようにし、個と個の響き合いが、学級全体としての響き合いに高まっていくような支援をしていくことにした。

③自己変革の確かめ・・・伝え合いの授業の後には、振り返りシートなどを活用し、自己の変容に気づかせる機会を設けてきた。関連し合いながら伝え合う中で、「ああ、そうだったのか。」「そういう考え方もできるのか。」「やっぱりそうだったんだ。」という気づきを経て、自分の読みがどう変化したのかを自分自身で振り返らせ、前には気づけなかったことに気づいている自分に気づかせた。それを知ることで、自分自身の「初読力」の伸びを体感させたいと考えていた。

④文章全体を意識した読み深め・・・読み深めていく際には、当然、本文の言葉に着目させながら話さなくてはならない。しかし、細部にだけ目を配るのではなく、常に文章全体を意識した読み深めをさせていきたい。子どもたちの発言を受けとめながら、比較対象となる部分に目を向けさせたり、場面による変化に気づかせられるような投げかけをしていきたい。そうすることによって、子どもたちの発言が、場面を行きつ戻りつしながら繰り返され、みんなでその部分をめくったり、読み返したりしながら読み深めていくような学習にしていきたいと思う。

2. 単元目標

- ・杉作品を読み進めていく中で、作品に共通する家族愛や思いやり、作品のおもしろさに気づく。
- ・登場人物の言動に着目して読み、物語の主題について考えることが出来る。
- ・自分の考えと友達の考えを比較しながら積極的に話し合いに参加し、自己の変容に気づくことができる。
- ・声に出して読むこと(聞くこと)を楽しみながら、読み深めに活かすことが出来る。

3. 単元計画 (全14時間 ※1Mは15分)

第一次 杉みこ子ワールドへようこそ(1)

- ・オリエンテーション(単元全体を見通す)(1)
- ・「杉さんクイズ10」に挑戦(適宜)
- ・『かくまきの歌』9作品を読んで一言感想を書く(家庭学習:1日1作品)

第二次 『わらぐつの中の神様』と出会おう(4)

- ・『わらぐつの中の神様』の範読を聞き、初発の感想と初発でつかんだ主題を書く(1)
- ・難語句を確かめる(1+家庭学習)
- ・新出漢字を学習する。(1)
- ・初発の感想をもとに学習課題について話し合う(1)

第三次 登場人物の言動に着目して1の場面を読み、マサエやおばあさんの人柄やわらぐつに対する思いを読み取る。(2=6M)

- ・学習課題に基づいて1の場面をひとり読みする。(2M)
- ・学習課題について、読み取りをもとに話し合い、自己の変容を確かめる。(4M)

第四次 登場人物の言動に着目して2の場面を読み、おみつさんや大工さんが大切に考

えていることを読み取る。(2+2M)

- ・学習課題に基づいて2の場面をひとり読みする。(1)
- ・学習課題について、読み取りをもとに話し合い、自己の変容を確かめる。(8M)

第五次 3の場面のマサエの言動からマサエの成長を読み取り、おばあさんがマサエにわらぐつの話をした意味について考える。(2+1M)

- ・学習課題に基づいて3の場面をひとり読みする。(1)
- ・学習課題について、読み取りをもとに話し合い、自己の変容を確かめる。(4M)

【研究会本時】

第五次 杉みき子ワールドを楽しもう(2)

- ・お気に入りの1作品を再読し、自己変容を確かめる。(1)
- ・再読での発見を伝え合い、杉みき子作品の共通点について考える。(1)

4. 単元の考察

(1) 主張点とかかわって

①導入の工夫と「杉みき子ワールド」の堪能について・・・本単元の導入に当たっては、子どもたちの実態を踏まえて「杉みき子さんクイズ」をすることで、作者への関心を引くとともに、作品理解の手助けとした。本文を読み進めていく中で、マサエやおばあちゃんの方言について話し合われた際に、クイズにしてあった杉さんの出身地が話題にのぼった。子どもたちも杉さんの出身地・新潟県をイメージしながら読み進められていた。また、文庫本「かくまきの歌」についてもいわゆる“読書嫌い”の子たちが、単元学習終了後も読書タイムに文庫本を開いて読みふける姿が見られた。それらの姿から読書好きの子のみならず、多くの子どもたちが「杉みき子ワールド」を堪能できたのではないかと考えている。

②熟読教材「わらぐつの中の神様」と子どもたちの気づきについて・・・本教材では、主題につながる「相手の立場にたって心を込めてすることの尊さ」のみならず、子どもたちの弱点である「簡単にあきらめないことの大切さ」を「自分の力でなんとかお金をためて実現させようとするおみつさんの姿」や「なかなか思うようにわらぐつが作れなかったり、なかなかわらぐつが売れなかったりしてもあきらめることのないおみつさんの姿」から感じ取らせたいと考えていた。おみつさんの姿について語られるとき、教室前面に掲示してある「簡単にあきらめない」という言葉をさして「これと似てるなあ。」という発言が聞かれた。作品をみんなで楽しむと共に、自分たちの生活にも照らし合わせながら読み進めることができたと考えている。

③学習課題の必然性と子どもたちの高まりと④音読記録の活用については「5. 成果と課題」の項であわせて述べる。

(2) 互いのまなざしが響き合う姿は

国語科では、学校提案と関わって、ひとり読み(教師はそれをみとり、授業展開に活かす)によって自己の考えを持って話し合いに参加し、関連して伝え合うことを通して互いのまなざしを響き合わせ、そのことによって自己変容を確かめることが、初読力を育成していくことにつながると考えて実践してきた。

実際の授業場面を振り返りながら考察することにする。

【10月25日：水曜日 二場面からわかる大工さんの人柄についての話し合い】

38段落の大工さんの言葉「ああ、そりゃ、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場の仲間や、近所の人たちの分も買ってやったんだよ。」をとらえて、「大工さんはやさしい人だ」ととらえている子が4名いた。ここでは、児童20が迷い無く「大工さんは気配りが出来る人」とつけ足した。そこに関連して児童31が「でも、ここで大工さんが赤くなるのはおかしい。」と自分の疑問点を投げかけた。そこで、その話し合いに入る前にもうひとつ子どもたちのひとり読みで気になっていた「大工さんは、お金持ち」と言う点について先に問いかけ、それが間違いであることに気づかせた。「大工さんというのはお金持ちだ」という子どもたちの概念も出されたが、児童18が本文に「わかぞう」と言う表記があることを指摘し、「まだ大工さんになったばかり。だから、そんなお金持ちじゃない。」と発言し、「お金持ち」という読み取りを訂正して、疑問点の話し合いに戻った。児童34が、「これはおみつさんが気に入ってきて会いに来た大工さんの口実」と発言。すぐ「口実って。」というつぶやきがあったため再度児童34が例え付きで「いいわけみたいなもの。」と説明した。続いて児童9が「その前におみつさんが、そんなら、どうしてあんなにたくさんと質問したことに対してすぐ答えられなかったから赤くなった。」児童27が、「大工さんは、わらぐつはいらなかったけどおみつさんに会うために買った。」と発言した。それに対し、児童8は「わたしは児童27に反対で、仕事の仲間にあげるために買ったと思う。」と発言した。そこで、「多くの人が考えてたように、やさしさで買っていったあげてたのなら、赤くなる必要はないよね。」ということは、ここでは、児童34が言ってくれたように口実と考えるのが正しいね。でも実際、お金持ちじゃないのに買っているから不思議だね。」と前置きして、ここに触れて読み取っていた児童12に発言を促した。児童12は、「大工さんは、みんなに広めたいほどそのわらぐつのことを気に入っているから買ってあげたんだと思う。」と発言し、共感を呼んだ。そこで、「じゃあ、

疑問点であった。大工さんはおみつさんのどこにひかれたのについてはどう。」と投げかけた。児童29が「大工さんは、いい仕事するのは見かけで決まるもんじゃないと言う考えを持っていて、25段落にあるようにおみつさんはそんな仕事をする人だから、それでおみつさんを好きになった。」児童18は「わらぐつにじゃないけど、そんなわらぐつを作るおみつさんにひとめ惚れした。」と発言した。そして、「大工さんは、外見よりも見た目という自分の考えをきちんと持っている人」という児童9の発言で大工さんの人柄についての話し合いを終えた。その後、続けておみつさんのそんな大工さんに出会って話を聞いたことでどうなったかを問うてみた。児童34が、「不安がなくなって、見かけよりも中身の方が大切だと考えるようになったと思う。」児童19が、39段落の「こっくりこっくりうなずきながら聞いていました。」と「なんだかとてもたのしく、えらい人のような気がしてきた。」のところで、たのしくとかえらい人というのはたぶん尊敬しているんだと思うから、大工さんの考えに賛成（納得）している。」と発言した。すぐに児童31が「わかった。おみつさんが、大工さんの言葉を聞いて、こんなに尊敬するくらい変わってるやん。だから、おばあちゃんがマサエにこのことを言いかつたんやと思う。」と発言した。児童29ら数名が「ああ。」と感嘆にも似たような声をあげた。子どもたちには、「そうかもしれないね。次回の三場面では、今、児童29が言ってくれたことが本当にそうかも確かめながら読んでいきましょう。」と言って授業を終えた。このように子どもたちは、ひとつの発言に関連しながら話し合いを進め、少しずつ読みを深めていくことができた。また、お金持ちの概念や赤くなった場面のまとめで教師が発言している。これまでは、子どもたちだけで解決させることにこだわりすぎて教師としての出所を失い（学習を方向付ける適切な支援の欠如）かえって子どもたちを混乱させてしまうことが多かった。その反省による発言である。学習の方向性を示す上で必要な支援であったと考えている。

前述の話し合いでの響き合いによって得られたと考える自己変革

【児童20：児童12の発言による自己変革】児童20は、話し合いの前、大工さんがわらぐつを何度も買って仕事仲間を買ってあげている様子をとらえて、「気配りのできるやさしい人」というとらえをしている。授業でも「気配りが出来る。」と発言した。しかし、授業の中で、それが「口実」であり、買っていたのは、そのわらぐつのよさにひかれ、それを仲間教えたかったからではないかという児童12の発言に触れた。そして、児童20は、話し合い後の考えとして、大工さんの人柄を「おみつさんの仕事ぶりに惚れた人」と書き、「前の考えの違うところに気づけたから自己変革◎」と記している。【児童8：自己の発言による変容Ⅰ】児童8は、発言が不得意な児童である。ただ、1学期の末ぐらいから、積極的に発言していきたいと言う思いを抱きつつある児童である。おみつさんの人柄についての話し合い後の振り返りで、自己の学習をふり返り、自分と同じ意見だけでなく、違う意見にも耳を傾けられるようになってきたのがよかったので、次回はその意見を発表できたらいいと思う。と記していた。そして、本時で、自分の考えと反対の意見が出されたときにすかさず挙手をし、発言した。発言したことが受け入れられたということではないが、機会を逃さず発言できたことに対し、自分自身◎をつけて評価している。そして、自身の考えを改め、「仕事ぶりをよく見ている人」とまとめている。【児童12：自己の発言による変容Ⅱ】児童12は、本時において、お金持ちでもなさそうな大工さんが、いくつもわらぐつを仲間を買ってあげたことについて、自身の読み取りを伝え、みんなの共感を呼んだ。児童12は、前回のおみつさんの人柄についての話し合いの際にも、クラスの共感を呼ぶ場面があり、調子にのっている。授業の振り返りでも、「前と同じでいい所も気づけたし、アイデアがたくさん出せるようになったから◎」と記しており、自信を深めていることが伺える。【児童15：児童19の発言による自己変革】本時の終盤、児童19が大工さんの姿に感銘を受けるおみつさんの様子をとらえて「尊敬しているよう」という表現をした。この言葉に響いた子は多かった。児童15は、授業の振り返りで、「児童19がそんなけいという言葉を使ったので、考えがかわった。」と記し、大工さんの人柄を「おみつさんにたのしく、えらく感じ、そんなけいされる人。」と書いている。【児童29：児童34・児童31の発言による自己変革】児童29は、本時の最終で、児童34の「おみつさんは、大工さんの言葉によって変わった。」という発言に対し、「あつそうかと思った。」と記している。また、児童31の学習課題に迫る発言に対し「児童31の発言は言葉も出ないくらい、はあ～と思いました。」と記していて、これまで自分が気づいていなかったことに対して大きく共感を覚え、自分の新たな考えとして取り入れていることがわかる。

5. 成果と課題

成果としては、ひとり読みの充実によって子どもたちが関連しながら話し合いを進める中で自己の変革を確かめられるようになってきたことがあげられる。そして、それによって自己変革を遂げられたことは成果といえるであろう。また、話し合い時における教師の適切な支援については、少しではあるがこれまでの反省が活かし、学習の方向性を示すことが出来たように思う。一方で課題は山積である。まず、研究会における本時の課題が子どもたちの実態から遠いものであったため、一部の上位の子たちにしか響き合いが生まれなかったことがあげられる。授業によっては、全体に近い響き合いも生まれたが、それぞれの授業において、子どもたちにとって必然となる課題の厳選は今後も課題である。また、研究協議会後の後援会で佐藤学先生からご指摘いただいた授業形態の変革は、大きな課題である。ようやく自分の中で確立できてきた授業スタイルを思い切って変えていかねばならない。板書をきっちり残すことが有効であると考えてきたが、子どもたちとの距離をより縮めていくためには、子どもたちといかに正対している時間を増やしていくかが問われる。黒板を使わないのではなくて、もっと効果的に使い、どの授業でも全ての子に高まりがある授業作りに努めていきたい。また、研究協議会で、指導助言の津田先生からご指摘いただいた話し方や声の小さい子への指導、最後まで聞くことの指導といった基礎的な力の育成、また、私自身大切にしたいと考えている国語授業における音読の活用にもっと力を注ぐ必要がある。ご参会いただいた先生からいただいた「読み方の指導」についても、自分自身もう少し研鑽を深め、自分に足りない部分を見つけたいと思う。